

職員に回覧し、本人を覚えている職員と昔話に花を咲かせました。

子どもたちの育つ力は予測を超えることがあります。とにかく自分を信じて生きていく力を養うことができれば、結果は本人が作っていくことになるのでしょう。関わる大人の役割は、

子どもの将来のためできるだけの援助を提供することでしょう。大人になった時、「いろいろな人に出会えたな」となつかしく振り返ってくれることが私たちの喜びです。

20周年記念シンポジウム報告

2005年4月29日、三重県総合文化センター中ホールにて、あすなる学園20周年記念シンポジウムを開催しました。司会を前園長の清水将之氏（現・関西国際大学 人間学部教授）にお願いし、村瀬嘉代子先生の基調講演に引き続き、3名のシンポジストをお招きして『子どもの育つ場から』をメインテーマにそれぞれの立場から語っていただきました。今回はその様子を紹介します。

基調講演

『親子の絆とこころの居場所』



<講師紹介>

村瀬 嘉代子氏

奈良女子大学文学部卒業。
現在、大正大学人間学部教授。
カウンセリング研究所所長。臨床心理士。
文学博士。

著書に、

『心理療法とは何か』（金剛出版）
『すべてをこころの糧に』（金剛出版）
『小さな贈り物』（創元社）等多数。

あすなる学園が20周年をお迎えになりましたこと、心からお喜び申し上げたいと存じます。『親子の絆とこころの居場所』というテーマでございますが、非常に重篤な状態にある子どもさんというのは、親子の絆も危うい、中には世の中には自分の親を知らないという方もありますし、いったいこの世の中に生きていることの意味があるのだろうか、生まれてきて良かったのだろうか、という居場所感が無いのですが、これからはじめに骨組みになるお話をさせていただきまして、後段はその方の立場に応じた力添えによって人は生きる希望を取り戻していくという具体的な例をお話させていただければと思います。

“親子の絆”というものは、考えてみますと基本的には生物学的な関係を元にしております。例えば夫婦という関係は離婚すれば元に戻って他人ですけれども、親子というのは実態的には解消という事は有り得ない訳で、生涯に亘って継続していくという、他の人間関係とは決定的に違う特質を持っています。一部の動物の親子は自分の種以外の子どもでも例外的に養育いたしますが、人間の場合は生物学的な繋がりを越え